

心を澄まし さづけを取り次ぐ



大教会では神殿講話の後、教会長・ようぼくが互いにおさづけを取り次ぐ

真朋

発行所
 天理教芦津大教会
 〒546-0003
 大阪市東住吉区
 今川8丁目6番32号
 電話 06 (6702) 1980
 FAX 06 (6700) 1854
 Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
 印刷所 天理時報社

道具でもどんな金高い値打でも、心の理が無くば何にもならん。さづけの処、よう聞き分け。

明治23年7月7日 おさしづ

教祖年祭の元一日は、教祖が現身を隠され、存命理をもってお働きくださるようになった日です。その後、だんだんと別席制度が整えられ、広くおさづけの理を拝戴できるようになりました。教祖十年祭までに全国各地に1千カ所以上の教会が生まれ、そこを拠点におさづけを戴いたようぼくたちがおたすけに励み、教勢が大きく伸展しました。まさに「扉を開いて、世界たすけへ踏み出す」と仰せくださった姿です。

私たちようぼくが親神様の御用を担うためには、まずは親神様の思召を聞かせていただき、思召に合う心になることが必要です。別席のお話によって心のほこりを払い、澄み切らせる。9度の別席を通してだんだんと心を澄まし、「たすかりたい」から「たすけたい」心へと切り替え、おさづけを拝戴し、生きながらにして生まれかわる。

おさづけは、教祖が御存命でおられる証し。心を澄まし、たすかってもらいたいとの思いを込め、人に取次いでこそその宝です。「世界一れつたすけたい」とのをやの御心にお応えできるようべくへと成人させていただきますしう。

正面方如

年末に妻が脚を負傷し、歩行困難になったが、年末年始は病院はどこも開いていない。救急外来も専門医が不在のため、正月は家で安静にするしかなかった。最近、週末など病院が閉まっているときに限って家族が熱を出すことが多く、病院が開いてないことに些か不足をしていた。

教祖百四十年祭を勤め終え、年祭活動も区切りを迎えた。大教会で毎日勤めていたお願いづとも終わつたが、教祖は常に変わらず世界たすけに駆け回っておられる。ようぼくである私たちも「年祭活動が終わったから」「週末だから」と言つて休んでいるわけにはいかない。今も身上や事情で苦しんでいる方、おたすけを待っている方がたくさんおられる。

年祭活動の勢いそのままに、おたすけに働いて働いて働いてまいりましょう。

(庄)

《春季大祭 神殿講話》

日々心澄まして教えを実践し
にをいがけ、おたすけ、丹精に励もう

大教会長 井筒梅夫

ようぼくの自覚

昨春秋の大祭で、真柱様は、「思召通りの世の中をつくり出すためには、その教祖の手足となつて世界中に親神様の思いを広める者が必要であります。その役目を担う

のが、おさづけの理を戴いたようぼくであります」と、ようぼくの役割を端的にお示しく下さいました。このお言葉は、ようぼくに對する、道の親のご期待の表れだと思ひます。

私たちは、一人ひとりさまざまな立場を持っています。家庭の中では親や子、夫や妻という立場があり、教会でも、会長や教会長夫人、また役員や布教所長などの立場があります。仕事場や地域社会

において役を担っている人もおられると思います。こうした立場は、親神様からその人のいんねんに相應しい、いわば服を着せていただいているようなものだと考えていただきたいのです。

しかし、ようぼくという立場は着せていただく服ではなく、服を着ている生身の身体が、私自身がようぼくなのです。なぜならば、服は脱ぐことがあります。

私は教会長ですが、この立場を後継者に譲れば、教会長という服を脱ぐことになります。大企業を重役だ、国会議員だと、いくら胸を張ったところで、その服を脱いでしまえば、その立場ではなくなくなります。どんな立場でも同じことが言えますが、ようぼくという立

場は服ではなく、さまざまな立場という服を着ている本体、生身の私自身がようぼくなのです。

私たちは、おちばで9度の別席順序運び、真柱様を通して御存命の教祖からおさづけの理を頂戴しています。「願い通りすみやかに許す」とお言葉を頂いたそのときから、頭のてっぺんからつま先まで、尊いようぼくの理が染み渡っています。人だすけの理が身体中を巡っているのです。

私たち一人ひとは、骨の髄までようぼくで、その上に立場を頂いています。ようぼくは、どんな立場になろうが、それを譲ろうがどうしようが、いつまで経つてもようぼくです。立場の前にようぼくである。これがようぼくの自覚です。

お道の香り

ようぼくの役割について真柱様は、「ようぼくは、世界中に親神様の思いを伝える役目を担っている」と示されました。つまり、未信仰の方に、親神様の思いを伝え、信

仰の素晴らしさ、ありがたさを映していくのが、ようぼくの大切な役割の一つです。

よく布教活動という言葉を使いますが、布教の「布」という字には、「広く広げる」とか、「まき散らす」といった意味があり、「教」は教えという意味ですから、布教活動とは、「教えを広く伝えるための活動」ということになります。お道では布教のことを「にをいがけ」と表現しています。

「にをいがけ」という表現には、^{なかな}香しい上品な香りを感じます。香しい花にはきれいな蝶々が寄ってきます。私たちようぼくも、お道の香しいにをいを醸し出せるような信仰者にならなければなりません。それには親神様が、

世上から見ても、あれでこそ成程の人や、成程の者やなあといい心を持って、神一条の道を選んで、何彼の処鮮やかと守護しよう。明治23年5月6日と、私たちに促してください。なるほどの人」に成人することだと思ひます。

なるほどの人

まずは、にをいを掛ける主体である私自身が、お道のにをいを漂わせられる人になることを心掛けねばなりません。教祖の香りを醸し出せるようになるためには、心を澄ます努力が肝心です。教祖が、心の澄んだ人の言う事は、聞こゆれども、心の澄まぬ人の言う事は、聞こえぬ。

『稿本天理教祖伝逸話篇』

176 「心の澄んだ人」

と、仰せになつてゐるように、心が汚れたままでは教祖にお願いやご相談をしても、「聞こえぬ」と仰せになります。しかし心を澄ます



ことで、どんなことでもお聞き届けくださるのです。心を澄ますために、八つのほこりを教えていた

だいています。これを我が心と照らし合わせて、日々胸の掃除に努め、心のほこりをしっかりと払い、心を入れ替えて努力することで、心はだんだんと澄んでいきます。

そして、教祖のひながたの道を手本に、日々の暮らしの中で、教えを素直に実行することで、世間の人から「なるほど、天理教の人は違うな」と感心され、お道に興味を持つてもらえるような存在になるのです。

世間の人々は、ようぼくその人を見て天理教を知ります。ようぼくの言動をそのまま天理教として理解をします。「山の仙人ではなく里の仙人に」と聞かせていただくように、「天理教を知りたければ私を見てください」と胸を張って言えるような「なるほどの人」になる努力をすることが、真柱様が仰せになる「世界中に親神様の思いを伝える役目を担うようぼく」になるための態度です。

さらには、このにをいがけは、私自身を見てもらうことだけに留まらず、こちらから働きかけていくことでもあります。おさしづに、にをいの事早いほがよいで。急いでやってくれ。(中略)この

人ににをいを掛けんならんと思えば、道の辻で会うても掛けてくれ。これからこれが仕事や。

明治40年4月7日

とあるように、親神様は、積極的ににをいを掛けることを促されています。お道のにをいを掛ける際に、まず心掛けることは、相手に対して優しい思いやりのある態度で接することです。そうすることで、こちらの話に耳を傾けてくれ、関心も持つてくれるようになるでしょう。教祖は、

やさしい心になりなされや。人を救けなされや。癖、性分を取りなされや。

『稿本天理教祖伝逸話篇』

123 「人がめどか」

と教えられました。このお言葉はそのまゝ「なるほどの人」の条件です。ようぼくはこのお言葉を

理と情

よく肝に銘じなければなりません。この優しさや思いやりは、をもちたりのみこと様のお働きで、人が持ち合わせている感情です。その一方で、くにとこたちのみこと様のお働きに象徴されるように、この世は理の世界です。常に周囲に温かみを与える情を心に満たしながら、理の世界で生きるのが、お道の信仰者であり、殊にようぼくの日々の通り方です。理と情は二一つです。

「理に厳しい」という表現がありますが、これはこの人に何とか成人してもらいたい、たすかっほしい、という相手に対する愛情の裏打ちがあるからこそその厳しさです。ただ単に、「気に入くない、腹立たしい、思い通りにならない」といった感情からであるならば、その相手は育たないし、たすかもありません。みかぐらうたに、むごいことばをだしたるもはやくたすけをいそぐから

とあるように、これが理に厳しい態度です。一方、おさしづで、情に流れなよ〜、情に流れてはならん、と前々より度々諭したる。

明治36年3月21日

これ皆よんどころ無く情に流れて来た。情に流れて居ては、ぶつ潰して了うのも同じ事。

明治40年4月7日

と、通すべき理を通さず、立てるべき理を立てずに、ただただ感情に流されることを、親神様は厳しく戒めておられます。大変だろうな、辛いだろうなという感情は誰もが持っていますし、利害関係にあるところにおもねることもあるかもしれません、そうした情に流されて、心の在り方や通るべき道を示すことをしなければ、人は育たないし、たすかりもしません。その人の成人とたすかりを真剣に考えて、愛情深く接していくことが、ようぼくの「情の厚さ」です。

理と情の順序

こういう話をする、では理が先か、情が先かという話になりま

す。このことについて教祖の道すがらを尋ねてみたいと思います。教祖はひながたの道で、まず貧

に落ち切ることから始められま

したが、この教祖の言動に対して周囲の人々は、「狐が憑いた、正気を失った」と嘲り笑いました。ところが、ある時期から教祖は「生き神様」と慕われ尊ばれるようにな

りました。ひながたの道中の大きな転換期です。そのきっかけは、

をびや許しです。をびや許しが道明けとなって、真実の教えが各地に広まっていったのです。最初は、「お産の神様」としてうわさが広

まり、次第に「お産だけではなく、どんな病もたすけてくださる神様らしい」とのうわさが広まり、大勢の人がお屋敷へ参るようになり

ました。うわさというものは、誰かがたすかつて初めて立つものです。をびや許しは最初はご自身で試されて、次に娘のおはる様が安産なさ

りました。が、あくまでもご家族の中のことでしたので、誰もが鵜呑

みにはできません。家族以外の人

がたすかつて、初めて「安産の神様」としてのうわさが立ち始めるのです。その最初の人が、清水ゆきという女性です。

教祖は、をびや許しを願い出たゆきさんのお腹に、三度息をかけた三度撫でて「人間思案は一切要らぬ。親神様に凭れ安心して産ませ

ていただくよう」と諭されました。が、ゆきさんは出産への不安から、

毒忌みや凭れ物など、昔からの安産の習慣も取り入れ、あちらの産神様、こちらの産神様へとお参りを

するなど、親神様に凭れ切れずに、その結果、産後の熱で約1ヵ月

床に臥せってしまいました。このことを教祖から「疑いの心があったからや」と諭されたゆきさん

は、「なるほど」と感銘し、深くさんげをして、2度目のをびや許し

を頂く際には、教祖の教えを守り、親神様に凭れて出産に臨んだところ、不思議なほど軽く産ませ

ただき、産後の肥立ちもすこぶる良いという安産の御守護を頂かれたのです。この話が村人の間に伝わり、うわさがうわさと呼んで、

「お産の神様」として知れ渡っていくのです。これが、をびや許しが道明けといわれる所以です。

ところで、ゆきさんはなぜ2度をびや許しを頂きに行つたのでしようか。当時のお屋敷の状況は、

周囲から笑われ謗られるような、村八分の状況でした。村八分にな

った家と親しく付き合うと、その人も、のけ者にされる危険性があ

りました。そんな中を、なぜゆきさんは2度もお屋敷に参つたのか。実はここには教祖の深い愛情とい

う裏付けがありました。教祖が月日のやしろとなられる以前、教祖は

出産なさる度毎に母乳がたくさん出たので、乳不足で困っている家があればその子を預

かつて、お乳を与えられたことが度々とありました。当時はミルク

などなく、生まれた子が母乳を飲まなければ、やせ衰えてあとは死を待つばかり、という時代でした。また、母親に母乳が出なければ、

他の女性にお乳をもらおう、もらい乳という習慣がありました。それを教祖は、自ら声を掛けて



人の赤子を預かってお乳を含ませ、我が子同然にお育てになったのです。清水ゆきさんもその一人でした。小さな頃から、母親に「あなたは中山家の奥さんに命を繋いでもらって、育てていただいたんですよ」と聞かされて大きくなった。貧に落ち切られてからも、「中山家は大変なことになっているけれど、みきさんから受けた御恩は忘れられないかんで」と聞かされて、教祖の温かな愛情と御恩を心に刻んだことだと思えます。ゆきさんにとって、教祖は月日のやしろでもな

く神様でもなく、自分に命を与えてくれ、育ててくれた、近所の中山家の心優しいおばちゃんだったのです。こうした一日があったからゆきさんは、危険も顧みずに、2度に亘ってをびや許しを頂きに教祖のもとに参られたのです。

お道は情から入って、次第に理が治まっていくのだと思えます。だから、理が先か、情が先かと問われれば、基本的には情が先だと思えます。情から入って、理が治まるのです。

優しい心で接して理を治めても、出来るように努力をすれば、家庭の中も教会の中も、自然と治まっていくように思います。ようぼくは、この理と情で人を導き育てていくのです。

これがにをいがけの基本であり、ようぼくの大切な御用であるおたすけと丹精の基本の一つです。これをしっかりと心に置いていただきたいと思えます。

にをいがけ

親神様は、私たちようぼくに積

極的ににをいがけをするように求めておられます。お道が対外的に積極的のにをいがけをした最初は、教祖が娘のこかん様に命じて行われた浪速布教でした。これに倣って、神名流しや路傍講演などを行うことがあります。またパンフレット配りや、一歩進んで戸別訪問という方法もあります。

また、お互いはいろいろな人たちと関わり合いながら暮らしています。そうした人たちの中には信仰者もいれば未信仰の人もいますから、未信仰の人は、にをいがけの対象者です。それは家族や親戚も同様ですが、複雑な関係で、かえって信仰を伝えることは難しいと感じる人もいるでしょう。しかし、その人が身上になったり事情を抱えたときは、間違ひなく親神様のお手引きです。そうした機会を逃さない、という心構えを持つ必要があると思えます。

いずれにしても、にをいがけには少しの勇気が必要です。そんな私たちにとって、心強いお言葉があります。

どんな所にをい掛かるも神が働くから掛かる。なか／＼の働き言うまでやない。出るや否や危なき怖わき所でも守護するで通れる。 明治26年7月12日

親神がちゃんとそばにいて働いてやるから心配をするな、という実に頼もしいお言葉です。

にをいは親神様が掛けてくださるので、私たちが自信を持つて声を掛ければよいのです。「どうしましたか、大丈夫ですか」「教会に行きましよう」「おぢばへ帰りましよう」と一言声を掛ければ、あとは親神様が働いてくださり、守護してくださるのです。

私たちは、なぜ天理教を信仰しているのか。それは教祖の教えが素晴らしいからです。親神様の御守護がありがたいからです。お道の人たちの心が温かいからです。信仰が嬉しいからです。

この思いを、率直に胸を張って堂々と、信仰の喜びを知らない人たちに伝えていけば良いのです。これが、にをいがけです。ようぼくの一言のにをいがけは、人の運

立教百八十九年 春季大祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、世界一れつが互いに兄弟姉妹としてたすけ合う、陽気ぐらしの世界実現を楽しみにこの世をお創り下され、約束の年限の到来により、教祖をやしろとしてこの世の表にお現れ下さいまして、深き思召をお説き明かし下さいました。爾来、教祖には五十年に互るひながたの道中、筆舌につくせぬ御苦労の中を、明るく勇んで神一条に御丹精下され、陽気ぐらしへ向かうたすけ一条の道をお付け下さいました。そして明治二十年陰曆正月二十六日、子供可愛い親心から、その成人を促して現身をお隠し遊ばされ、存命の理を以て扉を開いて世界たすけにお出まし下さいました。この教祖年祭の元一日をお偲び申し上げます。只今から役目にあずかる者一同、御前に参き集いました芦津の道の子と相共に、教祖年祭の元一日に思いを馳せて、ひながたを以てお急き込み下されたおつとめを一手一つに心陽気に勇んで勤めて、春の大祭を執り行わせて頂きます。何卒、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

この二十六日には、いよいよ教祖百四十年祭を迎えさせていただきます。芦津に繋がる教会長、ようぼく一同は、この御年祭を成人の節目として、各々が心を定めてたすけ一条の大いなる前進をお誓いし、論達第四号を指針として、三年千日を仕切つておたすけと丹精に、真実を尽くして努め励まして頂きました。顧みて深き親心にお応えするにはまだく至らぬ歩みでございましたが、その中にも数々の結構な御守護を頂戴し、御慈悲にお抱え頂きまして、恙なくお連れ通り頂きましたことは誠に有り難く、茲に言改めて厚く御礼を申し上げます。

私共は、海山も只ならぬ深く高き親心と、三年千日に賜りました言葉に言い尽くせぬ御守護への喜びを教祖百四十年祭に運ばせて頂き、この御年祭を次への出発点として、各々の心の成人と、たすけ一条の更なる前進をお誓い申し上げます。

何卒、一同の真実の心を大いなる御心にお受け取り下さいます。百四十年祭の年に相応しい成人の道をお連れ通り下され、次への歩みを一手一つに心勇んで踏み出させて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

立教百八十九年 春季大祭 教祖殿の儀祭文

御存命の教祖の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

思えば教祖は、月日のやしろとお定まり下されてより五十年に互る長の年限、親神様の御心のままによろづいさいの理をお説き明かし下され、ひながたのをやとして、筆舌に尽くせぬ御苦労の中を明るく勇んで神一条に御丹精下さいまして、これのたすけ一条の道をお付け下さいました。更には、御存命の理をもって、今尚世界たすけの先頭にお立ち下さいまして、よろづたすけの上にお働き下さいます親心の程は、唯々有り難き極みでございます。

私共は、教祖百四十年祭を迎えるに当たり、教祖にお喜び頂き、御厚恩に何としてでもお報いさせて頂きたいと、論達第四号を心の指針として、各々が心を定め、おたすけの実践に努めて、時句の上に一手一つに励んで参りました。顧みますれば、現身を隠してまでも子供に成人を促された深く厚き親心にお応えするには、至らぬ歩みでございましたが、その中を教祖の先回りのお導きと御存命の理の御守護のまにく年祭活動をここまで恙なく勤めさせて頂きまして、この月の二十六日に教祖百四十年祭を迎えさせて頂けます事は、誠に有り難く感激の至りでございます。

私共は改めて、年祭の元一日に思いを致し、ようぼくたる自覚を昂めて、更なる成人を期して、たすけ一条に直向きに邁進させて頂き、教祖の子供可愛い一念の親心にお応えさせて頂く決心でございます。

届きませぬ私共ではございますが、何卒、御存命のお働きのまにく一同の成人をお導き下され、この上共に教祖の道具衆として、陽気ふしんの御用にお使い頂きまして、教祖年祭という十年に一度の節から、喜びの芽の吹く御守護を賜りますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

教祖百四十年祭 よろこびのおぢば帰り

をやへの思い おぢばを満たす

立教189年1月26日、教祖百四十年祭が執行された。この日に向けて全教は、「諭達第四号」を心の指針として、3年間と仕切つて成人の道を歩ませていただいた。

そして年祭当日、御存命の教祖にお会いしたい、お礼を申し上げたい、成果をご覧いただきたいと、日本国内はもとより、海外からも多くのようばく・信者がおぢばへと足を運んだ。

岡本公夫さん（真伯教会長）は、長を譲つたら、今まで以上におた遠くブラジルから約30時間かけて すぐに駆け回りたい」と語った。

◇ ◇ ◇

帰参。教祖百十年祭当日に教会を設立し、初代会長としてちょうど 年祭翌日の1月27日に晴れてよ30年の節目であったが、身上を押 うぼくとなったのは、奄美大島から帰参された別府よすみさん（大してのおぢば帰りとなった。

岡本さんは「会長として未熟だった私を、30年間無事お連れ通り 関わりはあったが、3年前、ご主人の出直しをきっかけに教会の朝いただいたお礼を申し上げた。会

づとめへの日参を始め、2年前から別席運び始めた。

「まずは兄弟姉妹のおたすけをさせていたきたい。また、主人が役場勤めが長く、その関係で集落のほとんどの方と親しくしているので、そうした方のお世話取りを通じて、おたすけに励みたい」と



岡本公夫さん



別府よすみさん

抱負を述べた。

◇ ◇ ◇

同じ日、台湾から帰参した洪善榮さん（真明彰化教会）もおさづけを拝戴した。善榮さんは、真明彰化教会長・洪克明さんの四男で、「父の計らいと毎年お年玉を貯めていたおかげで、年祭の旬に帰参でき、お守りとおさづけを頂戴することができました。大教会長様



洪克明さん（左） 善榮さん（右）

をはじめ皆様のお世話取りにより、教会で今年最初のおさづけの理拝戴者として良き出発を賜りました。心より感謝します」と語った。
同じ台湾から帰参した李秋燕さん（真明新營教会）は、25日におぢばで生まれて初めての雪を体験。また帰参中に、会社の重要事案であった国際認証取得がうまく運びそうとの連絡が来て、心の大きなつかえが取れたという。
李さんは「教祖にもたれきつての心定めのおかげで御守護を頂き、成人の道を深めさせていただきました。また、井筒ふみ子奥様から教祖のお話を聞かせていただき、本当に素晴らしい年祭となりました」と語った。



李秋燕さん（右）

修養科を修えて

修養科からの出発

鳥栖分教会 江崎千恵子 73歳

私の主人の実家は仏壇の仕事をしていました。私たちは先祖供養を大切にしてきました。主人がスキルス性胃がんを患い、「何かできることはないか」と思い、四国八十八カ所霊場を回りました。そして最後は高野山までお礼参りに行きました。奇跡的に主人のがんは5年で寛解しましたが、滝修業が私の身体には無理でした。これ以上の先祖供養はできないと思いました。



そんなときに、鳥栖分教会の加藤前会長様と知り合いになり、ご縁があって天理教に導か

れました。

私は現在、けいれん性発声障害という病気を抱えています。この病気が、私が修養科に入るきっかけになりました。

病気になったのは3年程前、主人を亡くし、半年くらい経ってからでした。思うように声が出ず、先の見えない不安の中にいました。が、昨年10月に、治したい一心で憩の家でのセカンドオピニオンを受けました。憩の家で京都大学の先生の治療やリハビリを受けられるなら、修養科に入って、その間に病気を治したいと思いました。

11月に修養科に入り、憩の家での治療、リハビリが始まりました。この病気はなかなか治りにくく、手術を受けるか、3カ月に1回のボトックス注射を勧められました。リハビリも月に1度、3カ月との説明でした。

そのような中で私は、人の力だけで何とかしようとしていた自分の心を振り返るようになりました。気持ち切り替え、「せつかく修養科に入ったのだから、親神様の教えを学び、お力をお借りしながら、

治していこう」と心に決めました。

「医者の手余り、神がたすける」とお聞かせいただくように。

修養科に来たものの、詰所では誰一人知り合いはおらず、おても何もできない状態でした。しかし、修養科に来て、その時々で自分に必要な人との出会いがあるのだと強く感じました。例えば、おてふりができなくて、落ち込んであきらめようとしていると、上手な方が現れて教えてもらうことができ、また頑張ろうと立ち直ることができました。

また、始業式で高井主任先生がお話くださった言葉が心に深く残っています。「皆さんは、神様に引き寄せられて出会った人たちです。そしてここで多くのことを学び、身に付けたことを活かして、人をたすけることができる人になってほしい」というお話でした。

その言葉は、これから自分の歩む道に向けての大切なメッセージのように感じました。私は修養科の学びを通して、おたすけの大切さを知りました。人をたすけるためには、まず自分の

心をきれいにすることが大切で、座りづとめを覚えることで心が変わり、物の見方も変わっていきました。おてふりを通して、おつとめの大切さを学びました。

修養科で一番ありがたかったことは、人との出会いの素晴らしさです。教祖百四十年祭に来てくださる方、4月の婦人会総会で再会を約束している方、おちばへ帰れば会える方など、さまざまです。

修養科での経験を通して、日頃の教会での勉強の必要性を強く感じました。まだまだ分からないことも多いので、これからも教会でいろいろな学びを続けていきます。そして、これから別席を運ぶ方もアドバイスをし、おてふりや鳴物の練習をすることの大切さを周囲にお伝えしたいと思います。私は、これからがスタートだと思っています。

何もできなかった私が、ようばくになることができました。ここまで導いてくださった先生方や、仲間の皆さんに心より感謝申し上げます。

(修養科第103期感話大会より)

